

桜の宴 “春”への誓い

岩手県陸前高田市気仙町の金剛寺で17日、「陸前高田さくら祭り」が開催され、被災者らが宴を楽しんだ。「言い出しっぺ」は、周囲が「親分」と呼ぶ農林業の佐藤直志さん(77)。「がれきを見ながらの花見を復興のスタートにしよう」と提案した。

境内の桜には、咲き始めた数輪の花。久しぶりに集まった数十人の顔なじみ。あちこちから「元気で良かったー津波に襲われた自宅は半壊

(元気でいたんだ)」と声が上がった。津波に耐え、残った太鼓の音がとどろいた。3月11日。気仙川をさかのぼった津波は、堤防から約300メートル離れた山の麓にある佐藤さんの自宅に迫った。消防団の副分団長だった長男、昇一さん(47)は、逃げ遅れた人を誘導するため家の前の坂道を駆け下り、そのまま行方が分からなくなった。

翌日、自衛隊がヘリコプターから呼び掛けた。「避難してください」。佐藤さんは、妻、テル子さん(72)と昇一さんの妻、美緒さん(42)と一緒に、空に向かって腕で大きく「X」を示した。見つからない息子を残しては行けない。「親としても、人としても、いいことでねえべ」

津波から8日目。昇一さんの遺体は自宅近くのがれきの中から見つかった。顔を見た

陸前高田 供養の花見



らすぐに分かった。ブルーシートに包まれたまま数日間、道路の脇に置かれた。「かわいた板を腕にくくりつけ、ご飯と水を供えた。」名前と住所を書いた。

市場の魚を運ぶトラックの運転手。農作業を手伝ってくれる親孝行な息子だった。地元の祭り「けんか七夕」のおはやしの笛がうまかった。

佐藤さんは遺体が見つかった。でも自宅を離れなかった。「誰もいなければ、尋ね人が『この人はどこさ行ったべ』ときたときに誰が案内するんだ」。一歩ずつ前に進むという。ふるさとに春が来た。

陸前高田さくら祭り披露された「けんか七夕」の勇壮な太鼓。17日午前、岩手県陸前高田市気仙町

(門井聡撮影)